

# ブヌン語南部方言の第二位置疑問小詞 *bis*

野島本泰

nojima.motoyasu@gmail.com

キーワード：ブヌン語，南部方言，オーストロネシア語族，疑問小詞，第二位置

## 1 はじめに

本稿<sup>1</sup>の目的は、ブヌン語南部方言の第二位置疑問小詞 *bis* の統語的および意味的な諸特徴を明らかにすることである。それを考察することにより、ブヌン語南部方言における「疑問文」の特性、そして、「第二位置」とはどのようなものかを解明するのに必要となる諸事実が明らかになる。

本稿で用いる主な資料は、本稿筆者（野島）が採集した昔話に現れる言語形式と、作例に対する母語話者の内省報告である。

以下、本節では、ブヌン語の系統、分布、方言、音韻について述べたあと、文法を概観する。ここでは、語順、態、格標示体系、ここでとりあげる第二位置小詞にはどのようなものがあるのかを少し詳しく見る。

### 1.1 系統・分布・方言・音韻

ブヌン語は、オーストロネシア語族に属する言語で、台湾中南部（南投縣仁愛郷および信義郷，花蓮縣萬榮郷および卓溪郷，台東縣海端郷および延平郷，高雄市那瑪夏区および桃源区）で話されている。ブヌン族は約5万人である。3つの方言群，すなわち北部方言群，中部方言群，南部方言群に大きく分かれ，さらに5つの下位方言に分かれる（小川・浅井 1935, Li 1988）。本研究で記述の対象とするのは南部方言で，言語資料は高雄市那瑪夏区で収集した。

---

<sup>1</sup> 本稿の執筆にあたっては，多くの方々に助言をいただいた。特に，落合いずみ氏，千田俊太郎氏，それに言語記述研究会（2014年6月29日，京都大学）のメンバーに感謝の気持ちを述べたい。本研究の基礎となる資料の収集では，数多くの母語話者の方々にお世話になった。高雄市那瑪夏区達卡努瓦村（旧：三民郷民生村）のブヌン語話者の皆様，特に周文罷氏（ブヌン名 *Bukun Takistaulaan*, 男性，80歳代），周銀能氏（ブヌン名 *Lanihu Takistaulaan*, 男性，70歳代），また，同じく那瑪夏区瑪雅村（旧：三民郷民権村）出身のト衰氏（ブヌン名 *Bukun Ismahasan Islituan*, 男性，50歳代）には，わずらわしい質問に丁寧に答えていただき，多くのことを教えていただいた。どうもありがとうございます。なお，本稿における誤りはすべて本稿筆者（野島）に責任がある。

南部方言の子音は *p, b, v, m, t, z* [ð], *d, n, s, l* [ʎ~l], *k, ng* [ŋ], *h* [h~χ], '[ʔ] の 14 個。このうち、子音 *s, t* は母音 *i* の直前で口蓋化し、それぞれ [çi], [tei] と発音される。また、子音 *s* は同じ音節の中で母音 *i* の後ろに来た時も口蓋化して [iç] と発音される。子音 *y* [j], *w* は外来語を含む少数の語にのみ現れる。母音は *a, i, u* の 3 つ。母音には長短の区別があり、本稿では長い母音を同じ母音を並べることで表記している。アクセントは非弁別的である。2 音節以上からなる語の場合、「語の、後ろから数えて 2 番目の母音を含む音節」が高いピッチで発音される。

ブヌン語は、大雑把に言って、いわゆる膠着語である。つまり、語は接辞などの形態素をかなり多数ふくみうるが、形態素どうしの境界は概ね明瞭である。語形成には、接頭辞、接尾辞、接中辞、接周辞などの接辞付加のほか、さまざまな型の重複が頻繁におこなわれる。また、複合も用いられる。

## 1.2 文法概観

本節では、ブヌン語南部方言の文法を概観する。語順、態、格標示体系、第二位置小詞について述べる。

### 1.2.1 語順

述語が節頭に来る。述語以外の成分は、基本語順では、述語の後ろに来る。

- (1) *mabananaz saia.*  
*man*            *NOM.3SG.DIST*  
 あれは男だ。
- (2) *mataz a asu=a.*  
*AV.die*    *NOM dog=NOM.DIST*  
 その犬は死んだ。
- (3) *ma-pataz kaimin mas hanvang*  
*AV-kill*    *NOM.1PE*    *OBL deer*  
 私どもは鹿を殺した
- (4) *mauk-'ainunu-a                    sia dalah=tan.*  
*AV.turn:round-round-IMP.AV*    *LOC earth=NEU.PROX2*  
 この島の周りを回りなさい。

### 1.2.2 態

ブヌン語には「フィリピン型」と呼ばれる態（ボイス）の体系がある。どの動詞も、動作主態(Agent Voice, AV)か、被動者態(Patient Voice, PV)か、場所態(Location Voice, LV)か、状況態(Circumstance Voice, CV)のいずれかである。これらの態範疇の標示は、接辞付加またはゼロ派生のいずれかの手段によっておこなう。例えば、語根形態素 *pataz* 「殺す」から

は、動作主態 *ma-pataz*, 被動者態 *pataz-un*, 状況態 *is-pataz* が作られる（期待される場所態 *\*pataz-an* は用いられないようである）。

例(3)では述語動詞が動作主態であり、その態範疇は、節の主格成分 *kaimin* 「私ども」が（述語動詞の表す「殺す」という事象において）動作主であることを表している。その結果として、斜格成分 *mas hanvang* 「鹿」が被動者であると解釈される。これに対し、次の例(5)では述語動詞が被動者態であり、その態範疇は、節の主格成分 *a maaz a ivut* 「その蛇」が被動者であることを表している。その結果として、動作主者格成分 *=s isbabanal* 「ババナル姓の人」が動作主であると解釈される。

- (5) *pataz-un dau=s isbabanal a maaz a ivut.*  
 kill-PV HS=AGT CN NOM what NOM snake  
 ババナル姓の者がその蛇を殺したそうだ。

このように、節の主要部である述語動詞の態範疇によって、従属部が動作主なのか、被動者なのかといったことがわかるしくみになっている。

### 1.2.3 格標示体系

格標示体系は、人称代名詞と他の名詞類で異なる。人称代名詞は大きく格変化する。まず中立形と非中立形の区別があり、非中立形として5つの異なる格形式を持つ。5つの格とは、すなわち、主格、動作主格<sup>2</sup>、斜格、所格、所有格である。主格、斜格、所有格には自立形と接語形の区別がある。以下、表1にブヌン語南部方言の人称代名詞を挙げる（ただし、すべての形式を網羅しているわけではない）。なお、表1で「—」としてあるのは、該当する形式が存在しないことを示す<sup>3</sup>。

表1：ブヌン語南部方言の人称代名詞

	中立形	非中立形							
		主格		動作主格	斜格		所格	所有格	
		自立形	接語形	接語形	自立形	接語形	自立形	自立形	接語形
1SG	<i>zaku</i>	<i>saikin</i>	= <i>ik</i>	= <i>ku</i>	<i>mazaku</i>	= <i>ku</i>	<i>zakuan</i>	<i>inaak</i>	= <i>nak</i>
1PE	<i>zami</i>	<i>kaimin</i>	= <i>im</i>	—	<i>mazami</i>	—	<i>zamian</i>	<i>inaam</i>	= <i>nam</i>
1PI	<i>ita</i>	<i>kata</i>	= <i>ta</i>	= <i>ta</i>	<i>ma'ita</i>	= <i>ta</i>	<i>itaan</i>	<i>imita</i>	= <i>ta</i>
2SG	<i>suu</i>	<i>kasu</i>	= <i>as</i>	= <i>su</i>	<i>masuu</i>	= <i>su</i>	<i>su'uan</i>	<i>isuu</i>	= <i>su</i>
2PL	<i>muu</i>	<i>kamu</i>	= <i>am</i>	= <i>mu</i>	<i>mamuu</i>	= <i>mu</i>	<i>mu'uan</i>	<i>imuu</i>	= <i>mu</i>
3SG	<i>sai=tia</i>	<i>sai=a</i>	—	= <i>sia</i>	<i>masai=tia</i>	—	<i>saian=tia</i>	<i>isai=tia</i>	—
3PL	<i>nai=tia</i>	<i>nai=a</i>	—	= <i>nai</i>	<i>mania=tia</i>	—	<i>naian=tia</i>	<i>inai=tia</i>	—

このうち、接語代名詞の主格と動作主格の違いが、小詞 *bis* の現れ方にとって意味を持つことを第3.5節で見る。

<sup>2</sup> 動作主格は、三人称単数および三人称複数以外は、斜格接語形と同一である。

<sup>3</sup> 三人称単数および三人称複数は、前接語指示詞によって近称、遠称を区別しうるが、表では遠称のみを挙げてある（遠称は、前接語指示詞 *=a*（主格）または *=tia*（中立形）によって標示されている）。

それに対し、人称代名詞以外の名詞類は格変化に乏しい。形態的には、中立形と所有格形の区別がわずかにあるのみである。所有格形は中立形から接辞付加により作られる。その際、語幹が固有名詞の場合には接辞 *is-* が用いられ、普通名詞の場合には接辞 *itu-* が用いられる。次の例では、例(6)の *tina* 「母」が中立形、例(7)の *is-tina* 「母の」が所有格形である。また、例(8)の *titi* 「動物」が中立形、例(9)の *itu-titi* 「動物の」が所有格形である。

- (6) *tina*  
mother  
お母さん。
- (7) *is-tina tu sin-tupa*  
POSS-mother NEU.LG CV.PST-mother  
お母さんの言ったこと
- (8) *ma-sinap titi ma-damu*  
AV-chase animal AV-catch  
動物を追いかけて捕まえる
- (9) *itu-titi tu vauvu*  
POSS-animal NEU.LG backbone  
動物の背骨

形態的な格変化の乏しさのかわりに、それを補う統語的な格標示として、名詞句の前に置かれる格標示詞と呼ばれる小詞がある。主格標示詞には、単純主格標示詞 *a* と、複合主格標示詞 *maaz a* の2つがある<sup>4</sup>。両者がともに現れることもあり、その場合は単純主格標示詞が先行し、複合主格標示詞が後続する。複合主格標示詞は、疑問詞 *maaz* 「何」と主格標示詞 *a* がその順序で連続したものである。

- (10) *haungun a tumaz=a*  
AV:get:angry NOM bear=NOM.DIST  
その熊は怒った
- (11) *m-insuma maaz a babu*  
AV-appear what NOM pig  
その豚は来た
- (12) *haungun a maaz a tumaz.*  
AV.get:angry NOM what NOM bear  
その熊は怒った。

単純主格標示詞と複合主格標示詞の違いが、小詞 *bis* の表れ方によって意味を持つことを第3.6節で見る。

<sup>4</sup> 単純主格標示詞と複合主格標示詞の間には、意味上の、または、機能上の差異があるのかもしれないが、現時点では何もわかっていない。

斜格標示詞には、自立形式 *mas* と接語形式 =*s* がある。後者は母音または子音 *n* を末尾音に持つ語の直後に現れる。子音 *n* の直後に前接語の斜格標示詞 =*s* が現れた場合は、その子音 *n* は脱落する。

(13) *ma-pataz mas asu*

AV-kill OBL dog

犬を殺す

(14) *siza=s lukis*

AV.get=OBL tree

木を取る

(15) *maun=s taun*

AV.eat=OBL steam

湯気を食べる

動作主格標示詞は斜格標示詞と同形で、やはり自立形式 *mas* と接語形式 =*s* がある。後者は母音または子音 *n* を末尾音に持つ語の直後に現れる。子音 *n* の直後に接語形式の斜格標示詞 =*s* が現れた場合は、その子音 *n* は脱落する。

(16) *pataz-un mas tama*

kill-PV AGT father

お父さんが殺した (お父さんに殺された)

(17) *pataz-un=s ivut*

kill-PV=AGT snake

蛇が殺した (蛇に殺された)

所格標示詞は小詞 *sia* である

(18) *mu~mutah sia daan*

AV.vomit~vomit LOC road

道で吐いている

## 1.2.4 第二位置小詞

ブヌン語には「第二位置」に現れる小詞がある。ここで「第二位置」とは、「“節”における“第1番目の自立語”の直後」のことである。ただし、小詞の種類によって、何を「節」と見なすか、何を「第1番目の自立語」と見なすかが異なる。以下、第二位置小詞の意味・機能にしたがい、第二位置小詞のうち使用頻度が高いものを選んで概観していく。

### 1.2.4.1 接語代名詞

例(19)では、一人称単数主格の接語代名詞 =*ik* が節の「第二位置」、つまり、述語動詞 *tahu-av* の直後に現れている。同様に、例(20)では、二人称複数主格の接語代名詞 =*am* が節の「第二位置」、つまり、述語動詞 *uka-an* の直後に現れている。

(19) *tahu-av=ik*  
 tell-IMP.NAV=NOM.1SG  
 私に知らせなさい

(20) *uka-an=am tamasaz.*  
 not:exist-LV=NOM.2PL power  
 あなたたちには力がない。

例(21),(22)では、述語動詞に叙想法を標示する小詞 *na* が先行している。例(21)では、一人称単数主格の接語代名詞 *=ik* が現れる「第二位置」は、小詞 *na* の直後ではなく、述語動詞 *tahu* の直後である。また、例(22)では、一人称複数包含動作主格の接語代名詞 *=ta* が現れる「第二位置」は、小詞 *na* の直後ではなく、述語動詞 *is-takunav* の直後である。

(21) *na tahu=ik mas maluspingaz tu ma-kasa.*  
 IRR AV.tell=NOM.1SG OBL woman NEU.LG STAT-lazy  
 私は（ある）怠け者の女の話を話します。

(22) *na is-takunav=ta sain ma-kau-na-sia taklis tu asik*  
 IRR CV-discard=AGT.1PI NOM.PROX AV-throw-NA-LOC root:of:trunk NEU.LG palm  
 私達はこれをシュロの根元に捨てよう

例(23)では、述語動詞の前に、時間詞 *laupakadau* 「いま」が現れているが、一人称単数主格の接語代名詞 *=ik* が現れる「第二位置」は、時間詞 *laupakadau* の直後ではなく、述語動詞 *tahu* の直後である。

(23) *laupakadau hai, na tahu=ik mas hanvang mas sakut.*  
 now LDM IRR AV.tell=NOM.1SG OBL deer and pygmy:deer  
 いま（いまから）、私は鹿と羌について話します。

例(24)では、2つの節が接続されているが、二人称単数主格の接語代名詞 *=as* が現れる「第二位置」は、第1番目の節の述語 *ma-daing=in* の直後ではなく、第2番目の節の否定辞 *nii* の直後である。

(24) *ma-daing=in isuu a tian=an hai, na nii=as mahtu*  
 STAT-big=already POSS.2SG NOM.LG belly=NOM.PROX2 CONJ IRR NEG=NOM.2SG able  
*matin-biska~biskav.*  
 run-quick~quick  
 お前の腹はもう大きくなっている（=妊娠している）から、お前はあまり速く走れないだろう。

例(25)では、接続詞 *masa* に導かれている従属節に、主節が先行しているが、二人称複数主格の接語代名詞 *=am* が現れる「第二位置」は、主節の述語動詞 *ma<i>ka-'isa* の直後ではなく、従属節の述語動詞 *m-udaan* の直後である。

(25) *ma<i>ka-'isa bis kamu masa m-udaan=am kau-diip i.*  
 AV.through<PST>-where BIS NOM.2PL when AV-leave=NOM.2PL AV.to-there SFQP2  
 あなたたちはそこへ行った時、どこを歩いて行ったのか？

例(26)では、接続詞 *mais* に導かれている従属節に、主節が先行しているが、一人称複数排除主格の接語代名詞 =*im* が現れる「第二位置」は、主節の述語動詞 *is-pa-kaun* の直後ではなく、(アスペクト小詞 =*in* を介して) 従属節の述語動詞 *m<in>aun* の後ろである。

- (26) *na is-pa-kaun zami=s luhi mais m<in>aun=in=im.*  
 IRR CV-CAUS-eat NEU.1PE=OBL puppy if AV<PST>eat=already=NOM.1PE

私どもは(ご飯を)食べ終えたら、(そのご飯を)子犬に食べさせます。

例(27)では、補文標識 *tu* に導かれている補文、つまり従属節に、主節が先行しているが、二人称複数主格の接語代名詞 =*am* が現れる「第二位置」は、主節の述語動詞 *tupa* の直後ではなく、補文の述語動詞 *ma-tamasaz* の直後である。

- (27) *tupa kamu tu ma-tamasaz=am at sikamangmang hai,*  
 AV.say NOM.2PL COMP STAT-strong=NOM.2PL and huge CONJ

あなたたちは、あなたたちは強くて大きいと言ったが、

例(28)では、主格連結辞 *a* に導かれている補文、つまり関係節が主節に埋め込まれているが、一人称単数斜格の接語代名詞 =*ku* が現れる「第二位置」は、主節の述語動詞 *sadu-av* の直後ではなく、関係節の述語動詞 *ma-pataz* の直後である。

- (28) *sadu-av a bunun a na ma-pataz=ku=an.*  
 look:at-IMP.NAV NOM human NOM.LG IRR AV-kill=OBL.1SG=NOM.PROX2

私を殺そうとしている人を見なさい。

接語代名詞は否定文では節頭の否定辞の直後に現れる。例(29)では、第1番目の節に否定辞 *nii* と動詞 *haiyap* とが含まれているが、二人称複数主格の接語代名詞 =*am* が現れる「第二位置」は、否定辞の直後であって、動詞 *haiyap* の直後ではない。同様に、例(30)では、第1番目の節に否定辞 *nii* と動詞 *i-suuan* とが含まれているが、一人称単数主格の接語代名詞 =*ik* が現れる「第二位置」は、否定辞の直後であって、動詞 *i-suuan* の直後ではない。

- (29) *nii=am haiyap tu ma-tamasaz kaimin.*  
 NEG=NOM.2PL AV.know COMP STAT-strong NOM.1PE

あなたたちは、私どもが強いことを知らない。

- (30) *nii=ik i-suuan i, uka sui.*  
 NEG=NOM.1SG AV.at-LOC.2SG because AV.not:exist money

私はあなたのところにいません、お金がないから (=私はあなたのところへ嫁ぎません、あなたにはお金がないから)。

同様に、例(31)では、接語代名詞 =*im* が現れる「第二位置」は、禁止辞 *kaa* の直後であって、動詞 *pataz-un* の直後ではない。

- (31) *kaa=im pataz-un*  
 PROH=NOM.1PE kill-PV

私どもを殺すな

接語代名詞は 2 つ連続することがある。例(32)では、一人称単数動作主格の接語代名詞 =*ku* が節の「第二位置」に現れ、その直後にさらに二人称単数主格の接語代名詞 =*as* が現れている。

- (32) *na saiv-an=ku=as mas duhtas*  
 IRR give-LV=AGT.1SG=NOM.2SG OBL burnt:rice  
 私はお前にお焦げをあげます

2 つの接語代名詞が、同一の「節」に含まれる 2 つの「述語」それぞれに分かれて現れることがある。例(32)では 2 つの接語代名詞が述語動詞 *saiv-an* の直後に連続して現れているが、例文(33)では、2 つの接語代名詞のうち主格の方 =*as* が第 1 番目の「述語」である否定辞 *nii* の直後に現れ、一人称単数動作主格の接語代名詞 =*ku* は第 2 番目の「述語」である動詞 *saiv-an* の直後に現れている。

- (33) *na nii=as saiv-an=ku mas duhtas*  
 IRR NEG=NOM.2SG give-LV=AGT.1SG OBL burnt:rice  
 私はお前にはお焦げをあげない

#### 1.2.4.2 アスペクト小詞 =*in*, =*ang*

接語代名詞以外の第二位置小詞の中で 1 つの類をなしているのは、小詞 =*in* 「もう…になった、…した」と、小詞 =*ang* 「まだ、依然として」という 2 つのアスペクト小詞である。

アスペクト小詞 =*in* は、例(34)のように、述語の直後に現れる。

- (34) *ma-sauhzang=in a bunun=a.*  
 STAT-hungry=already NOM human=NOM.DIST  
 その人はお腹がすいた。

アスペクト小詞 =*in* は、接語代名詞とともに現れる場合には、例(35),(36)のように接語代名詞に先行する。

- (35) *pantinaun, ka-nahtung-an=in=ku.*  
 aunt do-finish-LV=already=AGT.1SG  
 おばさん、私はもう (掃き掃除を) 終えましたよ。
- (36) *p-anghanu-un=in=ku a maaz a sia bunun=a*  
 CAUS-adrift-PV=already=AGT.1SG NOM NOM NOM DIST human=NOM.DIST  
 私はその人間をもう (川に) 流した

アスペクト小詞 =*ang* は、例(37)のように、述語の直後に現れる。

- (37) *ma-t'ah=ang hai,*  
 STAT-raw=still CONJ  
 (その里芋は) まだ生だったから、

アスペクト小詞 =*ang* は、接語代名詞とともに現れる場合には、例(38)のように接語代名詞に先行する。



- (38) *nii=ang=as ka-nahtung*  
 NEG=still=NOM .2SG AV.do-finish  
 お前はまだ終えていない

次の例(39)では、アスペクト小詞 =*ang* と 2つの接語代名詞が連続している。

- (39) *na p-islunghu-un=ang=ku=as tastu-hanian.*  
 IRR CAUS-rest-PV=still=AGT.1SG=NOM.2SG one-day  
 私はお前をまだ1日休ませる。

#### 1.2.4.3 新しい認識を表す小詞 *hang*

小詞 *hang* は、節の表すことがらを、話者がようやく認識したことを示すようである。例(40)では、文頭の述語 *tuza~tuza* の直後に現れている。

- (40) *tuza~tuza hang a sain tu kama'ikit tu bunun*  
 true~true I:just:learned NOM NOM.3SG.PROX NEU.LG small NEU.LG human  
*tu ma-tamasaz-daingaz.*  
 COMP STAT-strong-very  
 この小さな人は、なるほどやっぱり本当に強いなあ。

#### 1.2.4.4 伝聞標示小詞 *dau*

伝聞小詞 *dau* は、節の表すことがらが、他人から伝え聞いたものであることを示す。例(41)では、文頭の述語動詞 *m-u-halhal* の直後に伝聞小詞が現れている。例(42)では、文頭の述語動詞 *m-insuma* の後ろに（アスペクト小詞 =*in* を介して）現れている。

- (41) *m-u-halhal dau a tumaz*  
 AV-INTR-fall:down HS NOM bear  
 その熊は落ちたそうだ
- (42) *m-insuma=in dau maaz a saia.*  
 AV-appear=already HS what NOM NOM.3SG.DIST  
 あいつがやって来たそうだ。

例(43)では、時間詞と主格成分とが述語動詞 *ma-kavas* の前に現れているが、伝聞小詞は文頭の時間詞 *habas* の直後に現れている。

- (43) *habas dau a takbanuaz hai, ma-kavas.*  
 long:before HS NOM CN LDM AV-go:head:hunting  
 昔、バヌアズ姓（の人たち）が首狩りに出かけたそうだ。

伝聞小詞 *dau* は、現れうる位置の点で他の第二位置小詞とは異なる。例(44),(45)では、主格成分が述語動詞の前に現れているが、例(44)では伝聞小詞 *dau* は文頭の複合主格標示詞の第1要素 *maaz* 「何」の直後に現れているのに対し、例(45)では主格成分の後ろに現れている。

- (44) *maaz dau a dalah=an hai, ma-'azumu.*

what HS NOM earth=NOM.PROX2 LDM STAT-globular

この地球というのは、丸いのだそうだ。

(45) *maaz a saang=a dau hai, i-sia-n=in kalapat.*

what NOM pine=NOM.DIST HS LDM at-LOC-VBZ=already cliff

その松というのは、崖のところにいるようになったのだそうだ。

伝聞小詞 *dau* は、1つの文の中に複数回現れうるという点でも、他の第二位置小詞とは異なっている。例(46)では、時間詞 *habas* 「昔」が述語動詞の前に現れているが、伝聞小詞 *dau* は時間詞の直後に現れているのみならず、述語動詞 *aiza* 「存在する」の直後にも現れている。

(46) *habas dau hai, aiza dau a maluspingaz=a, ma-nau'az*

long:before HS LDM AV.exist HS NOM woman=NOM.DIST STAT-beautiful

昔、美しい女がいたそうだ。

## 2 先行研究

本節では、小詞 *bis* についての先行研究を見る。先行研究には以下の5つがある。

### 2.1 何汝芬その他(1986)

何汝芬その他(1986:109)には小詞 *bis* の記述がある。何汝芬その他(1986)はその品詞を「助詞」とし、「助詞」のうちの「表示疑問语气(的)」(=疑問の「語気」を表すもの)の1つとしている。そして「*bif*用于谓语之后, 代替助词 *a* 的位置, 表示特指问, 含有难以置甚至轻视的语气」(=小詞 *bis* は述語の後ろ, つまり, 助詞 *a* に代わる位置に用いられ, 特殊疑問<sup>5</sup>を表示し, 信じがたいという語気, さらに軽蔑の語気を含むことさえある)と記述している。例は、次の2つを挙げている(次の2つの例(47),(48)において, 1行目は何汝芬その他(1986)の表記, 2行目と3行目は本稿筆者の表記と分析, 4行目は何汝芬その他(1986)の中文訳と, 本稿筆者による日本語訳である) :

(47) *madahpa bif saia i?*

*ma-dahpa bis saia i*

STAT-sick BIS NOM.3SG.DIST SFQP2

他当真生病吗? (あいつは本当に病気なのか?)

(48) *nani bif kasu haiap na mapatasi?*

*na nii bis kasu haiyap na ma-patas i.*

IRR NEG BIS NOM.2SG AV.know IRR AV-write SFQP2

你到底不会写呢? (お前は本当に書くことができないのか?)

<sup>5</sup> 特殊疑問 (何汝芬その他(1986)の「特指問」) は、本稿の疑問詞疑問文に相当すると考えられる。

## 2.2 布農語詞典（原住民族族語線上詞典）

布農語詞典（原住民族族語線上詞典）はブヌン語南部方言のオンライン辞典であるが、*bis* という見出し語はない。しかし、例には小詞 *bis* が見つかる。例えば、疑問詞 *maaz* 「何」の例として例(49)が挙げられている（次の4つの例(49)-(52)において、1行目は布農語詞典の表記、2行目と3行目は本稿筆者の表記と分析、4行目は布農語詞典の中文訳と本稿筆者による日本語訳である）。

(49) *Maazbis saicia sinkuzakuza ii?*

*maaz bis saitia sin-kuzakuza i.*

what BIS NEU.3SG.DIST CV.PST-work SFQP2

他到底做了什麼事啊? (あいつは一体どんなことをしたのか?)

同様に、例えば、疑問詞 *ku-isa* 「どこへ」の例として例(50)が挙げられている。

(50) *Ku-isabis kasu sangan ii?*

*ku-'isa bis kasu sangan i.*

to-where BIS NOM.2SG a:while:ago SFQP2

你剛才到底去哪裡啊? (お前はさっき一体どこへ行ったのか?)

上記の例(49),(50)の文頭の *Maazbis*, *Ku-isabis* の語尾 *bis* が、本稿で考察対象としている小詞である。この中文訳にあるように、小詞 *bis* は「到底」（いったいぜんたい）と訳されている。

このオンライン辞典にも出てくる小詞で、小詞 *bis* と似た機能を持つものに小詞 *bin* がある。例えば、疑問詞 *maaz* 「何」の例として例(51)が挙げられている。

(51) *Maazbin suu laupaku kasalpuun ii?*

*maaz bin suu laupaku ka-salpu-un i.*

what BIN NEU.2SG now SF-worry-PV SFQP2

你現在到底在憂慮什麼呢? (お前はいま一体何を心配しているのか?)

同様に、例えば、疑問詞 *sima* 「誰」の例として例(52)が挙げられている。

(52) *Simabin bunun tanghahai-iu mas maduhtan?*

*sima bin bunun tang-ha~haiu mas maduh=tan.*

who BIN human stroll-steal~steal OBL millet=NEU.PROX2

到底是什麼人經常偷這些小米? (この粟を盗んでいるのは一体誰なのか?)

例(51),(52)の文頭の *Maazbin*, *Simabin* の語尾 *bin* が、本稿で考察対象としている小詞 *bis* との間に統語的、意味的な共通点を持つ小詞である。

## 2.3 Shi (2009)

Shi (2009) はブヌン語南部方言の小詞 *tu* に関する論文である。ここには、小詞 *bis* を含む疑問文の考察がある。Shi (2009:123)は「私のインフォーマントによれば、標識 *tu* を持つ *wh*-疑問文は、標識 *bis* を持つ *wh*-疑問文の代わりと見なすことができる。ブヌン語の *bis* は

on earth 「いったい」という意味を持つ。」<sup>6</sup>と述べている。Shi (2009)が挙げている小詞 *bis* を含む例は次の例(53)である（次の例(53)において、1行目は Shi (2009)の表記、2行目と3行目は本稿筆者の表記と分析、4行目は Shi (2009)による英訳と、本稿筆者による日本語訳である）。

- (53) *m-a<i>via=as* *bis tu m-a-muhu?*  
*mai-via=as bis tu ma-muhu.*  
 ??-why=NOM.2SG BIS COMP STAT-feet:tired  
 "Why on earth are you (so) tired?" (お前はいったい何故に足がくたくたなのか?)

例(53)は Shi の例(131b)であるが、本稿筆者のおこなったエリシテーションでは、容認度が低いと判断されている。例(53)の容認度が低い理由は、主格の接語代名詞（ここでは二人称単数主格の =*as*）が小詞 *bis* の前にあるからだと思われる。このことは第3.5節で述べる。

## 2.4 Chang (2009)

Chang (2009)は、ブヌン語南部方言の疑問文の統語分析である。小詞 *bis* について、以下のように書いている。Chang (2009: 60-61)は、「*sima* 「誰」は *simabin* あるいは *simabis* と交換可能である。われわれのインフォーマントによると、*sima* に接尾辞として付加されている *-bin* あるいは *-bis* は驚きの気持といった態度を表す。Lin (1999)<sup>7</sup>もまた *bis* が付いている *wh* 疑問文を「いったい」という意味を表すものと解釈している」<sup>8</sup>と述べ、次の3つの例を挙げている（次の3つの例(54)-(56)において、1行目は Chang (2009)の表記、2行目と3行目は本稿筆者の表記と分析、4行目は Chang (2009)による英訳と本稿筆者による日本語訳である）。

- (54) *na-sima-bin/sima-bis sidangkaz mas Tahai (tu)?*  
*na sima bin/bis si-dangkaz mas tahai (tu).*  
 IRR who BIN/BIS AV.pull-stand:up OBL PN SFPQ1  
 "Who will save Tahai?" 「誰がタハイを助けるのか?」
- (55) *sima-bin haungu suu (tu)?*  
*sima bin haungun=su (tu).*  
 who BIN AV.get:angry=OBL.2SG SFQP1

<sup>6</sup> 原文は以下の通り："According to my informants, *tu* marked *wh*-questions can be seen as an alternative *bis* marked *wh*-question. *Bis* in Bunun means "on earth"."

<sup>7</sup> 林聖賢 (1999) 『山棕月影』晨星出版

<sup>8</sup> 原文は以下の通り："... *sima* is interchangeable with *simabin* or *simabis*. According to our informant, the *-bin* or *-bis* affixed to *sima* conveys an attitudinal tone such as a surprising emotion. Lin (1999) also interprets the *bis* marked *wh*-questions as conveying the meaning 'on earth'."

- "Who are you angry with?"<sup>9</sup> 「お前は誰のことを怒っているのか？」  
 (56) *sima suu haungun-un?*  
*sima=su haungun-un.*  
 who=POSS.2SG get:angry-PV

"Who is angry with you?"<sup>10</sup> 「誰がお前のことを怒っているのか？」

また, Chang (2009: 48)は, 「空間の疑問詞「どこ」はブヌン語南部方言では *isa* または *isabin/isabis* で表す」<sup>11</sup>と述べている。

## 2.5 Li (2010)

Li (2010)は修士論文で, ブヌン語南部方言における接語の統語分析である(言語調査は南投縣信義鄉羅娜村および東埔村でおこなったと述べている)。Li (2010)はこの論文の中で小詞 *bis* について, 何汝芬その他(1986)の例と, Shi (2009)の例を以下のように引用している(次の2つの例(57),(58)において, 1行目はLi (2010)の表記, 2行目と3行目は本稿筆者の表記と分析, 4行目はLi (2010)による英訳および出典, それに本稿筆者による日本語訳である)。

- (57) *na=ni?=?bis [kasu] φ-haiap na=mapatas-i?*

*na nii bis kasu haiyap na ma-patas i.*

IRR NEG BIS NOM.2SG AV.know IRR AV-write SFQP2

"Will you be able to write after all?" 「お前はいったい書くことができるのか？」(何汝芬その他 1986:109)

- (58) *ma-i-via=as=bis tu ...*

*mai-via=as bis tu*

??-why=NOM.2SG BIS COMP

"Why were you [...]?" 「お前は何故...たのか？」(Shi 2009:123)

この2つの例を分析し, Li (2010:143)は次のように観察している: 「例(57)では, 小詞 *bis* は接語の位置にあり, 主格代名詞の自立形に先行しているのに対し, 例(58)では, その小詞 *bis* が同様に接語の位置にあるが, 主格代名詞の接語形に先行していることに注目すべきである」<sup>12</sup>。「この2つの例は, 小詞 *bis* が主格代名詞の2つの位置に違いを設けていること

<sup>9</sup> 例(55)は, 「誰がお前のことを怒っているのか？」("Who is angry with you?") という意味にしかとれない。

<sup>10</sup> 例(56)は, 「お前は誰のことを怒っているのか？」("Who are you angry with?") という意味にしかとれない。

<sup>11</sup> 原文は以下の通り: "The spatial *wh*-word 'where' is represented by *isa* or *isabin/isabis* in Isbukun Bunun."

<sup>12</sup> 原文は以下の通り: "Note that in (5.12a) =*bis* is in clitic position and followed by a long NOM pronoun, whereas in (5.12b) the same Q marker is also in clitic position but preceding a short NOM pronoun." ここで, 例(5.12a)は本稿の例(57)であり, また, 例(5.12b)は本稿の例(58)である。例(58)では, 接語代名詞 =*as* が疑問小詞 *bis* に先行している。したがって, Li (2010)の英文における *preceding* は *following* の誤りだと思われる。

を示唆している：すなわち、主格代名詞（接語形）>小詞 *bis*>主格代名詞（自立形）。このことは、さらなる研究に値する。」<sup>13</sup>。

しかし、第2.3節ですでに述べたように、例(58) (=Shiの例(131b)の一部)は、本稿筆者のおこなったエリシテーションでは、容認度が低いと判断されている。したがって、Li (2010)が主格代名詞の位置に関して述べていることは、本稿で記述の対象としている方言（高雄市那瑪夏区で話されている方言）にはそのままではあてはまらない。この問題は第3.5節で取り上げる。

興味深いのは、Li (2010:143)が小詞 *bis* に Q (= yes/no-interrogative) という語釈をあてていることである。これに関して、第3.1節で示すように、小詞 *bis* は肯否疑問文にのみ現れるわけではなく、疑問詞疑問文においても疑問詞の直後に頻繁に現れることに注意すべきである。

### 3 小詞 *bis* の文法と意味

本節では、小詞 *bis* の統語的側面と意味的側面を明らかにする。

#### 3.1 疑問詞疑問文における小詞 *bis*

小詞 *bis* は、疑問詞疑問文、つまり「誰?」「どこ?」「どう?」などの情報を求める文に頻繁に現れる。

(59) *maaz bis<sup>14</sup> sian tu bunun tu.*

what BIS NOM.3SG.PROX NEU.LG human SFQP1

この人は何か?

(60) *ma-kua bis saia tu halinga i.*

STAT-how BIS NOM.3SG.DIST NEU.LG story SFQP2

その話はどのようなものなのか?

(61) *na pia bis babu kaun-un i.*

IRR how:many BIS pig eat-PV SFQP2

豚はいくつ食べるか?

(62) *ma<i>ka-'isa bis kamu masa m-udaan=am kau-diip i.*

through<PST>-where BIS NOM.2PL when AV-leave=NOM.2PL to-there SFQP

あなたたちはそこへ行った時、どこを通過して行ったのか?

<sup>13</sup> 原文は以下の通り：“These examples suggest that =*bis* differentiates the positions of the two subparadigms of NOM pronouns: short nom before =*bis* before long NOM. This issue deserves further study.”

<sup>14</sup> 疑問詞 *maaz* の直後に第二位置疑問小詞 *bis* が現れると、疑問詞の末尾子音 *z* は義務的に脱落する。つまり、[ma:biç]と発音される。ちなみに、子音 *z* の義務的な脱落は、もう1つの第二位置疑問小詞 *bin* が後続した場合にも起きる。つまり、[ma:bin]と発音される。この事実は、疑問詞 *maaz* と疑問小詞とが融合し、すでに半ば一語化していることを示唆している。

小詞 *bis* が現れるのは疑問詞疑問文における疑問詞の直後が圧倒的に多い。このことから、小詞 *bis* の主要な機能の1つが「疑問詞疑問文であることを標示する」というものであることは間違いないと言える。

### 3.2 理由を尋ねる疑問文における小詞 bis

本研究で主な資料としている昔話の中で、理由を尋ねる疑問詞疑問文、つまり「何故?」と訊いて理由が何かを求める文を探してみると、そこでは小詞 *bis* は現れていないことがわかる。

(63) *via tu m-insuma adii tumaz.*

why COMP AV-appear DIST bear

あの熊はなぜ来たのか?

(64) *via tu ka maupa=tan a inaak a*

why COMP ?? similar:to=NEU.PROX2 NOM POSS.1SG NOM.LG

*sin-pi-nau'az=an is.*

CV.PST-CAUS-beautiful=NOM.PROX2 SFQP3

私が綺麗にしたこのものは、なぜこのようなのか? (=私が施した化粧はなぜこんなふうにされたのか?)

(65) *ma-via tu panah-un saikin is.*

STAT-why COMP shoot-PV NOM.1SG SFQP3

なぜ私を撃ったのか?

(66) *mai-via saia tu tupa-un tu pitu i.*

??-why NOM.3SG.DIST COMP say-PV COMP seven SFQP2

あれは (= “七撃ちのダホ” というあだ名のあの人は) どうして「七」といわれるのか?

このように、理由を尋ねる疑問文では、小詞 *bis* は現れていない。しかしながら、エリシテーションでは、例(67)のように「理由を尋ねる疑問文に小詞 *bis* が現れても、容認度は低くはない」ということが確認できた。

(67) *mai-via bis kasu tu ma-muhu.* (作例)

??-why BIS NOM.2SG COMP STAT-feet:tired

お前は どうして足が棒なのか?

### 3.3 不定用法の疑問詞と小詞 bis

ブヌン語の疑問詞には疑問用法に加えて、不定用法がある。第3.1節、第3.2節で、小詞 *bis* が疑問用法の疑問詞を「述語」とする節にはよく現れることを見たが、それに対し、不定用法の疑問詞を「述語」とする節には小詞 *bis* は現れないようである。例(68)では疑問詞

*sima* 「誰」が、例(69)では疑問詞 *ku-isa~isa* 「どこへ行く」が不定用法で用いられているが、その直後に小詞 *bis* は現れていない。

(68) *sima mahtu ma-p-indadu hai, na ... pa-isuu.*

who able AV-CAUS-cure CONJ IRR CAUS-POSS.2SG

誰でもいい、(娘の病気を)直すことができる者がいたら、(娘は)そなたのものにしよう

(69) *ana tupa saikin tu ku-isa-isa hai, sa-kula'az-an.*

CF AV.say NOM.1SG COMP to-where~where CONJ see-bad-LV

私はどこへ行っても、見下される (=馬鹿にされる, 苛められる)。

### 3.4 疑問詞を含まない文における小詞 *bis*

第3.1節で小詞 *bis* が疑問詞疑問文に現れることを見たが、この小詞は疑問詞を含まない文にも現れうる。その場合、その文は例(70)のように普通の肯否疑問として解釈されることもあれば、例(71)のように反語疑問として解釈されることもあるようだ。

(70) *aiza bis kamu a kau-baav=tia i.*

AV.exist BIS NOM.2PL NOM.LG to-far:up:the:mountain=NEU.DIST SFQP2

あなた方の中に、山の上の方へ行った者はいるか?

(71) *ungat, sima bis kamun i.*

and:then who BIS NOM.2PL SFQP2

*antalam-un dau=s nas-tama-biung tu,*

answer-PV HS=AGT the:late-father-Biung COMP

*nii bis kasu inaak tu masinauba i.*

NEG BIS NOM.2SG POSS.1SG NEU.LG younger:sibling SFQP2

“で、お前は誰?” (と亡くなったブクンおじさんが言うと) 亡くなったビオンおじさんが答えて言った, “お前は私の弟じゃないか。”

### 3.5 小詞 *bis* の直前に現れうる接語代名詞

すでに見たように、小詞 *bis* は文の「第二位置」に現れるが、その「第二位置」には接語代名詞が小詞 *bis* とともに現れることがある<sup>15</sup>。その場合の接語代名詞は動作主格である。例(72)では、述語 *na pi-ku-un* 「どういうふうにするのか?」の直後に二人称複数動作主格の接語代名詞 *=mu* が現れており、そのさらに後ろに小詞 *bis* が現れている。

(72) *na pi-ku-un=mu bis kuus=an i,*

<sup>15</sup> ちなみに、アスペクト小詞 *=in* 「もう、すでに」は小詞 *bis* の直前に現れうる。例:

(a) *u-isa=in bis uvaaz=a.*

at-where=already BIS child=NOM.DIST

あの子供はどこへいったのか?



IRR CAUS-how-PV=AGT.2PL BIS arrow:bamboo=NOM.PROX2 because

*via tu ka mati-tmang m-astabal tu.*

why COMP ?? AV.cut-randomly AV-cut SFQP1

あなたたちはこの箭竹をどうするつもりなのか、なぜ（箭竹を）むやみやたらに切るのか？

例(73)では、述語 *na ku-maaz-an* 「何を使うのか？」の直後に一人称複数包含動作主格の接語代名詞 =*ta* が現れており、そのさらに後ろに小詞 *bis* が現れている。

(73) *na ku-maaz-an=ta bis saia ma-pataz, mais m-insuma=in.*

IRR use-what-LV=AGT.1PI BIS NOM.3SG.DIST AV-kill if AV-appear=already

私達はあれを (=あの熊を) 何で殺そうか、もし来たら。

それに対し、「第二位置」に（動作主格ではなく）主格の接語代名詞があり、その直後に小詞 *bis* が来る文は、容認度が低いことがエリシテーションで明らかになっている。例(74a-c)の3つは Shi (2009: 123)をもとに作ったものだが、この3つを対照するとわかるように、小詞 *bis* の前後に主格代名詞が来る場合、例(74a)のように自立代名詞が後続するのであれば容認度は高いが、例(74b,c)のように接語代名詞が前後に現れるのだと容認されなくなってしまう。

(74) a. *mai-via bis kasu tu ma-muhu.* (作例)

??-why BIS NOM.2SG COMP STAT-feet:tired

お前は どうして 足が くたくた なのか？

b. *\*mai-via=as bis tu ma-muhu.* (作例)

??-why=NOM.2SG BIS COMP STAT-feet:tired

お前は どうして 足が くたくた なのか？

c. *\*mai-via bis=as tu ma-muhu.* (作例)

??-why BIS=NOM.2SG COMP STAT-feet:tired

お前は どうして 足が くたくた なのか？

このように、接語代名詞と小詞 *bis* の連続は、代名詞の格によって容認度が変わり、そして、代名詞が自立形か接語形かの別によって容認度ががらりと変わってしまう。

### 3.6 単純主格標示詞 a は小詞 bis の直後に現れえない

単純主格標示詞 *a* は小詞 *bis* の直後に現れえない。例(75a, b)を対照のこと。しかし、複合主格標示詞 *maaz a* は、小詞 *bis* の直後に現れうる。例(75c)を参照のこと。

(75) a. *u-isa bis saia i.* (作例)

at-where BIS NOM.3SG.DIST SFQP2

あれは どこに いるのか？

b. *\*u-isa bis a saia i.* (作例)

at-where BIS NOM NOM.3SG.DIST SFQP2

c. *u-isa bis maaz a saia i.*

at-where BIS what NOM NOM.3SG.DIST SFQP2

あれはどこにいるのか?

何汝芬その他(1986:109)は小詞 *bis* の記述で「*bif* 用于谓语之后, 代替助词 *a* 的位置」 (= 小詞 *bis* は述語の後ろ, つまり, 助詞 *a* に代わる位置に用いられ) と述べている。この記述は, 「単純主格標示詞 *a* は小詞 *bis* の直後に現れえない」という事実初めて注目したものと見える。

### 3.7 後ろに自立語がない場合は小詞 *bis* は現れえない

第 2.2 節で小詞 *bis* と, それに似た意味を持つ小詞 *bin* を見た。この 2 つを比べてみると, 統語的振る舞いに決定的な違いがある。その違いとは, 小詞 *bin* は, 節に自立語が 1 つしか含まれていない場合にも現れうるのに対し, 小詞 *bis* は, そのような場合には用いることができない, というものである。例えば, 小詞 *bin* は疑問詞 *sima* 「誰」に後続して *sima bin i* 「誰?」のように文を完結させることができるのに対し, 小詞 *bis* はそのような位置には現れることができず (つまり \**sima bis.* / \**sima bis i.* はともに不適格), 自身の後ろに何か自立語を後続させなければならないという統語上の性質を持っている。

## 4 おわりに

本研究を通じて, 小詞 *bis* の統語的および意味的な諸特徴が明らかになった。以下, それをまとめる:

- (a) 小詞 *bis* は, 疑問詞疑問文 (つまり「誰?」「どこ?」「どう?」などの情報を求める文) に頻繁に現れる。小詞 *bis* は節の「第二位置」, つまり疑問詞の直後によく現れる。
- (b) 理由を尋ねる疑問詞疑問文 (つまり「何故?」と訊いて, 理由を尋ねる文) に限っては, テキストでは小詞 *bis* は現れていない。しかしながら, エリシテーションでは, 理由を尋ねる疑問文に小詞 *bis* が現れても容認度は低くならない, ということが確認できた。
- (c) 小詞 *bis* は, 不定用法の疑問詞の直後には現れえないようである。
- (d) 小詞 *bis* は, 疑問詞疑問文にのみ現れるというわけではなく, 疑問詞を含まない文にも現れうる。ただし, その場合, その文は普通の肯否疑問と解釈されることもあれば, 反語疑問と解釈されることもある。
- (e) ただし, 「第二位置」とはいっても, つねに述語の直後というわけではなく, 述語の直後に動作主格接語代名詞がついている場合, 小詞 *bis* が現れるのはそのさらに後ろである。
- (f) しかし, 同じ接語代名詞でも, 動作主格ではなく主格代名詞の直後には, 小詞 *bis* は現れえないようである。
- (g) 小詞 *bis* の直後には単純主格標示詞は現れえない。ただし, 複合主格標示詞 *maaz a* は現れうる。

(h) 小詞 *bis* は、節に自立語が1つしか含まれていない場合には、現れることができない。

以上(a)から(h)までの事実は、ブヌン語における「第二位置」および「疑問文」の考察を今後すすめていくにあたって、きわめて重要だと考えられる。

#### 略号

1SG: 一人称単数, 1PE: 一人称複数排除, 1PI: 一人称複数包含, 2QP: 第二位置疑問小詞, 2PL: 二人称複数, 2SG: 二人称単数, 3PL: 三人称複数, 3SG: 三人称単数, AGT: 動作主格, AV: 動作主態, CAUS: 使役接頭辞, CF: 反事実標識, CN: 氏族名, COMP: 補文標識, CONJ: 接続詞, CV: 状況態, DIST: 遠称, HS: 伝聞小詞, IMP: 命令法, INTR: 自動詞化接辞, IRR: 叙想法, LDM: 左方転移標識, LG: 連結辞, LOC: 所格, LV: 場所態, NAV: 非動作主態, NEG: 否定辞, NEU: 中立形, NOM: 主格, OBL: 斜格, PN: 個人名, POSS: 所有格, PROH: 禁止辞, PROX: 近称, PROX2: 近称2, PST: 過去時制, PV: 被動者態, SF: 語幹形成辞, SFQP1: 文末疑問小詞1, SFQP2: 文末疑問小詞2, SFQP3: 文末疑問小詞3, STAT: 状態接頭辞, VBZ: 動詞化辞

#### 参考文献

- 布農語詞典（原住民族族語線上詞典） [Available at: <http://e-dictionary.apc.gov.tw/bnn/Intro.htm>; accessed 26 June 2015]
- Chang, Chung-yang Marco. 2009. On the interrogative constructions in Isbukun Bunun. M.A. thesis, Graduate Institute of English, National Taiwan Normal University.
- 何汝芬, 曾思奇, 李文甦, 林青春 (1986) 『高山族語言簡誌 (布嫩語)』北京: 民族出版社
- Li, Lilian Li-ying. 2010. Clitics in Nantou Isbukun Bunun (Austronesian). M.A. thesis. National Chi Nan University, Taiwan.
- Li, Paul Jen-kuei. 1988. A comparative study of Bunun dialects. *Bulletin of the Institute of History and Philology* 59.2: 479-508.
- 小川尚義, 浅井恵倫 (1935) 『原語による台湾高砂族伝説集』東京: 刀江書院
- Shi, Chaokai. 2009. The linker TU in Isbukun Bunun. M.A. thesis. Kaohsiung: National Kaohsiung Normal University, Taiwan.